

凝視と決断と

—子規にみる明治—

松岡香

I はじめに

今春、松山市立子規記念博物館（地元の人たちはこの博物館を「子規記念館」と称している。この稿では以下すべて地元の呼称に従って呼ぶ）を訪れた私は、正岡子規の手になる膨大な量の文章や写生画に圧倒された。小学生時代からの作文集や回覧雑誌に始まって辞世の三句に至るまで、夥しい文字の羅列である。また、内容も、天下国家を論じる壮大なものからごく些細な日常生活の描写まで、多岐にわたっている。量といい内容といい、とても三十五歳で亡くなった一人の人間の残し得るものとは思えなかった。生涯を通じて頑健であったとは言いがたく、特に亡くなる前の六年半というものは病床に臥したままであった子規の、一体どこにこのようなエネルギーが潜んでいたのだろうか。

子規研究は、こうした疑問から始まった。再び子規記念館を訪れ、子規の著作を初期のものから順に読み始めた。こうした作業は今も続いているが、少しずつ読み進めて行くうちにはののかに見えてきたものがある。それは「明治」という時代である。ようやく緒につい

たばかりの子規研究ではあるが、本稿では何よりもまず、子規の情熱をかきたて、強い凝視を生み出した「明治」という時代と子規との関わりについて考えてみたい。

II 子規の選択

一、墓誌銘に関して

正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升
又ノ名ハ子規又ノ名ハ瀬祭書屋主人
又ノ名ハ竹ノ里人伊豫松山ニ生レ東
京根岸ニ住ム父隼太松山藩御馬廻加
番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新
聞社員タリ明治 年 月 日没ス享
年三十 月給四十圓

これは、子規が友人にあてた手紙の中で、「コレヨリ上一字増シテモ餘計ヂャ」と念を押しながら記した自らの墓誌銘である^①。事実や今、在るものにこだわり、「写生」の大切さを説いた子規の面目躍如とも言うべき、簡潔にして虚飾を排した文章である。まるで

香

絶対値記号でも付されたかのような確かなことばのみの集まりであるこの墓誌銘には、しかし一つの大きな欠落がある。誰もがすぐに気付くことだが、生年月日の記述がみあたらないのである。前述したように、子規は生涯を通じて記録することに執念を燃やし続けた人間であった。病床にあってさえも、庭の草花の様子や近隣のざわめき、家族や知人の動きなどを細大もらさず書き記し、倦むことがなかった。そうして三十五年の生存の証をひたすら文字で残し続けた子規が、自身の存在の原点とも言うべき大切な日付を、ただ簡単な気もちで書き洩らしたとは思えない。没年月日記入の要をあらかじめ想定し、その部分を空白しておくほどの周到さを見せた子規が、なぜ生年月日の記入には冷淡だったのであるうか。

松岡

子規記念館では、子規の生年月日を「慶応三年（一八六七）九月一七日（陽暦十月十四日）」と表わしている。また、子規に関する研究書の殆んども、この日付を「陰暦九月十七日」と記し、陽暦注を入れるなどして正確を期している。陰暦に慣れてきた日本が、世界の大勢に従おうとして欧米各国の使用する太陽暦の採用にふみきったのは一八七二年、明治政府が発足して五年めのことであった。この年の十二月三日を陽暦の一八七三（明治六）年一月一日とし、多少の混乱が予想される中で陽暦時代に入っていったのである。日常生活のレベルにおいて、これはかなりの摩擦を生じることになった。特に明治六年以前に生れた人々にとっては、陰暦陽暦二種類の誕生日を持つことになり、戸惑いや抵抗が大きかったことと思われる。久保田正文氏は、この二通りの生年月日を持たねばならなかったことが子規をためらわせ、その結果生年月日を削除することになったのではないかと推測した。俳句の世界は、季節の推移に敏感に反応する世界である。季語を大切にし、微妙な移ろいを感じとろうと

する者が、二つの異なった日付について無関心でいられる筈がないとして氏は、「この奇妙な矛盾と言おうか非理論といおうか、古さと新しさとのせめぎあいのようなものが、すくなくとも毎年一度ずつは子規を、いらだちのような、とまどいのような心理へいざなうたことであろう。あの、わずか百字ばかりの、緊張して収約された文章に、生年月日をしるさなかったことは、子規じしんの生へのいとおしみ・愛執、その論理性をのみならず、同時代者のひとしく置かれた新旧交替期の生活と思想の入り組みをそのものとして表現しているものとさえ言ううる」ととらえたのである。氏の指摘するとおり、確かに子規は陰暦と陽暦とに無関心なわけではなかった。

『墨汁一滴』の中でも、日本の四季の移ろいを考えた場合の陰暦陽暦の是非を論じようとし、判断を下しきれない理由を正直に述べている^④。陰暦に慣れ、その情趣にひかれる一方、陽暦の整合性も捨て難いとする記述には、子規の迷いが感じられる。子規にとって二通りの暦の存在は、心を悩ませるものであったかもしれない。が果たして、そのことのために子規は自身の生年月日を墓誌銘から削除したのであるうか。二通りの誕生日が、生年月日の削除につながるほどの重要な問題だったのであるうか。

この墓誌銘を手紙に書いた日より三年半近く前に、子規は一通の履歴書を作成し、大本営に提出している^④。これは、当時新聞「日本」の記者であった子規が、日清戦争従軍を希望した際に提出を求められたものである。「明治十八年三月六日」の日付の記されたこの履歴書の最初に子規は「一 慶應三年九月十七日出生」と明記した。陰暦に従ったもので、陽暦に改めたときの日付は記入していない。この履歴書と同時に提出したものであろう「従軍願」書に記されている生年月日も、当然のことながら履歴書と同じ日付になっている

のである^⑤。太陽暦二十数年の使用を経て、なお公式文書にも太陰暦が記入され、そのことに何の不都合もなかった様子がかがえる。子規は、正式文書には陰暦で記入することを自然のこととして受け止めていたのかもしれない。その一方で、明治三十四年十月二十七日は「蓋シ亦余ノ誕生日ノ祝ヒヨサメナルベシ」として次のように記すのである。「明日ハ余ノ誕生日ニアタル（舊暦九月十七日）ヨ今日ニ繰リ上ゲニ書飯ニ岡野料理二人前ヲ取り寄セ家内三人ニテ食フ。」これらからうかがえるのは、新旧二つの生年月日をその時々で器用に使い分け、必要な場合には注釈を入れるなどして折り合いをつけていた子規の姿である。墓誌銘に字数制限があるわけもなく、このことで削除したと考えるのは不自然ではないだろうか。そこで初めの疑問に戻る。なぜ、子規は自分の生年月日を墓誌銘に入れなかったのだろうか。

その鍵は、「月日」よりもむしろ「年」すなわち「慶応」にあったと思われる。明治の新時代特有の上昇志向にどっぷり浸っていた子規にとって、自分が維新の前の時代、今となってははるか遠くに感じられる「慶応」の生れであるということが、どことなくそぐわず、振り返りたくないこととなっていたのではないだろうか。

墓誌銘にもあるように、子規の父である正岡常尚（隼太）は松山藩御馬廻加番をつとめていた。主君の行列の警護役で、位は高くないが武士の家柄だったのである。その正岡家を継ぐべく育てられた子規は、母方の祖父である漢学者大原観山の命によって、小学校入学後もまげを結び、帯刀姿で歩かされた。明治五年に断髪令が出されて以来級友の殆んどは新時代の髪型になっており、子規はからかしの標的にされ、怪我を負わされたこともあったという^⑥。自身の出自に誇りを持ち、武門の生れであることそれ自体には何の反発も持

たない子規ではあったが、「まげ升（のぼ）さん」とからかわれた記憶は強く染みついたのかもしれない。その上、子規はいつも先を見てそれに向かって歩く人間であった。「慶応三年」という生年は、そんな子規にとっては前近代的な響きであり、墓誌銘に書くことをやめさせる結果になったのではないだろうか。

二、子規の受けた教育（幼少年時代）

次に掲げるのは、ペリーの来航（嘉永六年）から明治天皇の治世開始までの十五年間に起きた主なできごとを年代順に整理したものである^⑦。列強の外圧と内部に湧き起こった尊王攘夷の動きとに押し流されるようにして、二百六十年余り続いた徳川幕府が瓦解していった十五年であった。

一八五三（嘉永六）年

六月ペリー来航（浦賀）

七月プチャーチン来航（長崎）

一八五四（安政元）年

三月日米和親条約締結

一八五六（安政三）年

七月ハリス総領事来日（下田）

一八五八（安政五）年

四月大老井伊直弼就任

六月日米修好通商条約締結

九月安政の大獄始まる

一八六〇（万延元）年

三月桜多門外の変（井伊直弼暗殺）

一八六二（文久二）年

一月坂下門外の変

八月生麦事件

十二月英国公使館焼打事件

一八六三（文久三）年

五月攘夷始まる

七月薩英戦争

八月八・一八の政変

大和・生野の変

一八六四（元治元）年

六月池田屋事件

七月禁門の変

八月第一回長州征伐発表（総攻撃予定日―十一月十八日）

四か国連合艦隊下関攻撃（英・仏・蘭・米）

講和条約締結

十二月高杉晋作挙兵

一八六五（慶応元）年

四月長州再征（九月勅許）

十月条約勅許

一八六六（慶応二）年

一月薩長同盟成立

六月長州再征（八月）

一八六七（慶応三）年

五月兵庫開港勅許

十月大政奉還

十一月坂本龍馬暗殺

十二月王政復古の大号令

一八六八（慶応四・明治元）年

一月鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争）

三月五か条の誓文

四月江戸開城

八月睦仁親王即位（明治天皇）

九月一世一元の制

「明治」と改元

一連の討幕の動きの中心となったのは西郷隆盛・大久保利通らの薩摩藩、高杉晋作・桂小五郎らの長州藩、そして坂本龍馬・中岡慎太郎らの土佐藩である。子規の父隼太が仕えていた松山藩は維新に關して積極的な動きを見せず、鳥羽・伏見の戦いでは幕府の側についた。そのため、維新後は長州藩に占領され、後には土佐藩の影響の下に置かれたという^⑧。司馬遼太郎氏は、廃藩置県の際に官軍側の藩は県名と県庁所在地が同じであるのに対し、官軍非協力的であった藩はそれらが別になっている（石川―金沢、岩手―盛岡、愛知―名古屋、愛媛―松山）と指摘し、「松山は徳島と違って、明治維新のときに、いわば賊軍のように扱われました。松山十五万石の城下は、明治維新からほんの数年ですが、土佐から兵隊が来て、新政府の占領地になった。たいへんな屈辱であり、（略）穏やかな人情で知られる伊予の松山の場合、この屈辱が大きかったのかもしれない^⑨。」と延べている。確かに、瀬戸内海をはさんで向かい合う長州藩や、山を越えればすぐに行くことのできる土佐藩の隆盛を目のあたりにするのだから、松山の人々の不安や苛だちは強かったことであろう。五歳のときに父親を亡くした子規の教育に熱心にあたったのは、母方の祖父大原観山であったが、この著名な漢学者は次のような漢詩を遺している。

— 明治のみに規子と決断と視凝 —

炊経酌史送居諸

自分人称作蠹魚

一事対天無愧作

終生不読解行書^①

観山は松山藩きつての儒学者として知られており、藩主松山勝成の御用達を務め、激動する新時代に対処すべく藩をまとめることに心を砕いた。次代を担う若い世代の育成にも意欲的で、この祖父の初孫として生れた子規は、漢文の素読を学び、覚えの早さで観山に可愛がられた。この詩は八、九歳ごろの子規に贈られたもので、明治八年に観山が死亡する少し前のものとされている。

詩の中で観山は自分の読書に明け暮れた生涯を振り返っている。そして、そのことには何の愧じることもなく、「終生不読解行書」(自分は終生西洋の書物は読まない)と言い切っている。外庄に右往左往し、徒らに列強の威力や文明を良しとする当時の風潮を観山は苦々しい思いで見つめていたのであろう。語調の強さの中に子規へのメッセージがはっきりとうかがわれる、凜然とした作品である。

この祖父によって、子規は学問の世界に導かれた。結髪を強いられたことには困惑したであろうが、傑出した人物から従来の素養とされていた学問をしっかりと教えられたことの影響は大きい。確かに浮薄な西洋崇拜は斥けたけれども、観山は西洋の文化や事物そのものを否定したわけではない。子規の従兄で共に教えをうけた三並良の記憶によれば、観山は西洋を知ることの必要を感じ、深夜まで西洋事情についてまとめられた書物を筆写していたという。『西洋列国史略』や『英吉利の書簡』『増訂 采覧異言』など筆写されたものは多く、また蔵書にも『地球全図』のように世界に目を向けたものがみられる。頑なに門を閉ざすというような偏狭な教育を子規

は受けたわけではないのである。

観山は明治八年四月に没し、引き続いて子規は土屋久明のもとに通って漢学を学ぶことになった。ここで子規は漢詩を自ら作ることを教えられた。子規が創作活動に関心を寄せる始まりは、ここだったのである。与えられたものを素直に吸収しながら、子規は漢詩にも真面目に取り組んだ。「聞子規」という、十一歳の頃に作った五言絶句には、白居易や李白の明らかな模倣が見受けられる。獨創性はあまり感じられないが、子規が漢詩の作法に通じていたこと、有名な詩をよく理解していたことは確かであり、基礎がしっかり築かれていたことを表わしている。

もう一つ、子規の漢学の習熟度を示す資料がある。明治十二年の夏に疑似コレラにかかった子規が、回復後治療にあたった安倍義任に出した礼状がそれである。「月日勿々年巳二暮レ明治十三年ノ春ヲ迎ヘ余偶感スル所アリ 謹テ愚簡ヲ草シテ安倍國手ニ呈ス 熟ラ客夏ヲ顧ミレバ其月其日病ニ罹ル乎實ニ困苦無疆其病タル之ニ罹レバ生ル者ナク之ニ當レバ死セサル者ナシ 且ニ歩行スル者昏ニ黄泉ノ客トナリタニ健壯ナル者朝に蓮臺ノ族トナル 然ルニ余九死一生ヲ免レ唯獨リ世ニ存スルヲ得ルハ實ニ國手ノ治術宣シキヲ得妙薬ノ法ニ適スルニヨルヘシ 其傳染スルモ之ヲ懼レス暑烈シキモ之ヲ避ケス國手ノ厚情ヲ謝セント欲スレトモ辭ナク之ヲ報セントスレトモ能ハス余今十三年ノ元旦ニ逢フモ實ニ國手ノ賜ナリ聊カ濁酒一樽ヲ呈シ謝辭ニ易フルノミ 時嚴寒ニ逢フ國手請フ自愛セヨ^②」という文章である。大仰な表現が多く、十二歳の少年が書いたことを考えると些か滑稽の感さえ抱かせられる文章ではあるが、対句の用い方が効果的で、一つのリズムをもって流れている点で完成された漢文ということができよう。

後年、子規は短歌・俳句革新運動の先駆者として、以後の韻文の世界に多大な影響を与えるようになる。革新とはそれ以前の古いものを批判し、否定するところから始まるものであるが、そのためには古いものを知悉していなければならぬ。子規の場合、幼少のときに受けた教えが後の革新運動に大いに役立ったと言えるのではないだろうか。「子規は、古いことをよく知っていた。だから、新しいことをやろうとした時に、古いものを根こそぎ倒す、倒し方をよく知っていた」という指摘のとおりである。確かな人間の教える確かな学問こそ、新しいものを作り上げる原動力となるのである。西洋を嫌いつつも正しく理解し、後世に伝えようとする祖父観山の姿勢が、知らず知らずのうちに子規の中に染みこみ、大きな示唆を与えたのではないだろうか。

漢詩を作ることで自己表現の楽しさに気付かされた子規は、明治十三年に松山中学校に入学、多くの気の合う友人を得る。中でも、太田正躬・竹村鍛・三並良・森知之らとはいろんな面で一致する点が多く、「五友」と称するグループを結成して、漢詩を作ったり回覧雑誌を発行したりという文芸活動を繰り広げるのである。そして、その中心となるのはやはり子規であった。子規記念館にはその頃の回覧雑誌が展示されているが、表紙はもとより数々の挿絵の全てを描いたのも子規なら、ペンネームこそ違えているが中の寄稿も子規のものばかりという雑誌もあり、次々と変化を樂しむ子規の姿が浮かび上がってくる。幼い頃からずっと蓄えてきたものをようやく発散させられる機会を得た子規の、活気にみちた様子が容易に想像されるのである。

こうして発散につとめさせる一方、松山中学校は新しい知識の吸収の場として、子規にさまざまなものを提供した。子規が使用した

教科書の多彩な内容がそれを物語っている。教科書だけではない。土佐から山を越えて松山に入り、大人しい松山の人間をも瞬く間に巻きこんだ自由民権思想もまた、子規の前に新しい世界を開いてみせた。「自由」という新しい概念は、子規にとって非常に魅力的なものであった。文芸の方面にのみ自己表現の道を見出していた子規は、この自由民権思想に接することで新たな発散の場を得、以後政治の方にエネルギーを注いでいくのである。

子規が松山中学校に入学したのは明治十三年の三月である。松山中学校の前身は北予変則中学校といい、明治九年に英学所と勝山学校課外席とを合わせて作ったものであった。この北予変則中学が松山中学校と名前を変え、正式の中学校として新しい教育を掲げて出発したのは明治十一年六月である。子規は活気にみちた創設期の中学に入ったことで、時代の息吹を直接に肌で感じるようになった。松山中学校創設に尽力し、初代の校長も務めた草間時福は慶応義塾を卒業した気鋭の自由民権論者で、当時の愛媛権令（県知事）であった岩村高俊に見込まれて松山に赴任し、二八才の若さで中学初代校長になった人物である。もともと権令岩村自身も高知県出身で、進歩的な考え方の持ち主と言われていた。その岩村の方針に適うべく招かれた草間は、福沢諭吉の自由教育の中で育った人間であり、そこに加わったのが教育熱心の内藤鳴雪（学務課長）であったから、松山中学が若々しく活気にみちた気風の学校であつたらうことは想像に難くない。教師も一体となった演説会が開かれ、学校をあげて弁論を奨励する中学として、松山中学は急速に政治的雰囲気濃厚な学校になった。勿論、壮士たちが「『立志社』と大書した提燈を振りかざして街を練り歩き、『自由民権国会開設！』と辻々で絶叫した」という当時の松山の世情もまた、一層中学生たちを煽ること

凝視と決断と—子規にみる明治—

となった。

思春期のエネルギーは、基本的には向上を目指して突き進むものである。そして、そのために時には破壊的な言動で既存のものを否定したりもするものである。松山中学によって経験した政治的情熱はいたく子規の正義感を刺激した。そして驚くべき早さで彼をそれまでの遊戯的文芸の世界から引き離した。新しい時代——家柄や階級などの窮屈な制約から人を解放し、それぞれが才に応じて活躍の場を与えられる時代——への希望を熱い口調で人に語ることにその自分にふさわしい……。子規は「談心会」と名づけられていた弁論部に籍を置き、政談演説に若い情熱を傾けるようになる。「自由何クニカアル」（明治十五年十二月）「天將二黒塊ヲ現ハサントス」（明治十六年一月）と子規は矢継早に政治的な演説を行ない、全校学生にその名を知られるようになった。「天將二黒塊ヲ現ハサントス」の「黒塊」とは「国会」のことである。ますます高まりつつあった自由民権運動が国会開設を要望し、反政府の動きがはつきりしてきたため、政府はこの運動を弾圧しようとして弁論大会に敵しい姿勢で臨み、少しでも行き過ぎがあると思われる場合には即刻中止させるようになっていた。松山中学校においても例外ではなく、監督者（教師）が厳しく注意し、途中で弁者を職員室に連行することもあったようである。しかし、子規は怯まなかった。日本の暗黒を救うのは光明以外にないとし、「是光明トハ何ゾ 則チ一ツノ黒塊ナリ 此黒塊ハ実ニ光輝ヲ発シ世界ニ臨照スルモノナリ」と述べる。そして、天帝もこの黒塊の価値を認め、その現出を許そうとしているのに「天上ニ羅列スル衆多ノ星辰ハ何故ニカ之ヲ嫌ヒ亦天帝ニ訴ヘテ曰ク 天帝ヨ天帝ヨ決シテ黒塊ヲ出タス勿レ 未タ黒塊ヲ出タスノ時至ラザルナリ」と国会開設に反対する政治家の態度

を強調する。しかも、その反対の理由は自らの利益を守るためであるとして激しく政府を攻撃したのである。⑩ 比喩的な表現を用いているとは言え、これは国会開設を要望する政治演説であり、数回の注意を受けた後で弁論は中止となった。子規は職員室に連れて行かれたという。この演説は中断のまま終わったが、以後も子規の政治熱は続く。仲間数人と集まっては政談に没頭し、互いに演説を競い合った。また、中央の動静に通じる必要を感じて東京発行の新聞を購入し、回覧し合ったりもした。一つのこと熱中すると他のものが一切目に入らなくなるのが、子規の性格の特徴である。遊戯的文芸に向けられていたエネルギーは、そのまま政治の方面に転じられた。回覧雑誌作りである程度思いを語ることに慣れてきた子規は、ここでも仲間の中心となって活躍したのである。

こうして広く社会に目を向けた子規にとって、教育令改正が徐々に浸透し、画一的な教育を目指して当初の活力を失いつつあった松山中学校は、沈滞した存在となっていく。明治十四年、まだ子規が政治的覚醒を迎える前のことであるが、「愛比売新報」に子規の漢詩が入選作として掲載された。松山中学校新築を祝って作られた五言絶句であった。

賀學校新築^⑪

正岡 香雲

新築功方竣

巍然高聳雲

偏知王化及

億兆重新文

入学してしばらくの間、子規の眼に映る松山中学は、この詩のように高くそびえる輝かしい新時代の学問所であった。存分に学べる希望の象徴であったのだ。しかし、月日が経つにつれ、気概は失せ、教育は平板で無難な内容と化して子規を失望させていく。二年後の

明治十六年には、子規は松山中学を次のように決めつけるのである。

五月有故同諸生退松山中学校賦以述懷^⑧

松山中学只虚名 地少良師徒孰聽

言動何須講章句 染人不敢若丹青

喚牛呼馬世應毀 今是昨非吾獨醒

忽悟天真存万象 起披蛛網救蜻蜓

詩の前半は失意のことばが続く。思春期特有の焦慮と言った方が正しいかもしれない。かつての憧れを「只虚名」と言い放った子規の心中には、苦い失望があったのだろう。しかし、失望の中に長くとどまる子規ではない。後半の語句に表わされるように、彼は新しい希望を求めて立ち上がろうとするのである。地方での学問に限界があるのならば、中央に出て行こう——そう決意を固める転身の早さもまた、子規とその時代とに特有のものであった。

三、上 京

先に述べたように、松山藩は維新に際して幕府側に与し、そのため維新後には賊軍として扱われた。官軍派から賠償金を要求され、藩は困窮し士族は悲惨な生活を強いられた。薩摩と長州とが殆んど全ての点で日本を支配していた中であって、賊藩の士族の子弟が世に出るのは学問において外にはなかった。後見にすぎることが不可能である以上、個人の才能に恃むより道はなかったのである。子規もその友人たちも早くから進学を希望し、そのための上京を叶えようとさまざまに努力した。経済的に余裕のある者、両親の理解と協力を得られた者から順に中学を辞めていき、「十六年になるとつぎからつぎへと友人たちの上京の噂がたつ。風邪でもひいて二、三日学校を休んだりすると、学校中の生徒たちの間で、上京したのだら

うと評判になる」ほど上京する者は多くなったのである。この頃、子規は叔父加藤拓川や友人に何度も手紙を書き、上京を望む気もちの強さを訴えている。加藤をはじめとして周囲の者は時期尚早であるとし、中学高等科卒業後の上京をすすめるが、子規の意志は固い。次のように述べて、一日も早い上京の必要性を説くのである。

「(略)若し日本の開化をして一步を進ましめ田舎の學校をして充分盛大に(盛大とは教師も善良に規則も完美なるを云ふ)あらしめば我々書生は素より地方の小中學を卒業して後に都會に出て、一種の専門科に就て學問する事こそ順紋を経るものといふべきなれど如何せん維新以来日猶淺く學校は(地方)良教師に乏しく良規則を得ず 正に我中學校の如きは高等科を置と雖も一層善良なる教師の来るに非ず 一層高尚なる書籍を講授するに非ず(略)嗚呼光陰を如何せん日子を如何せん松山に一日の日子を消輝せば東京も亦一日二十四時間を経過せり 而して同時に多分の智識せんとするは果して何れか勝れるや(略)我假令貧生なり共壓制教師に服従せんよりは寧ろ自由の空氣を東京専門學校に吸はんと欲するなり」文面に漂うのは、子規の焦りである。生涯を通じて子規は吸収と発散とをエネルギッシュに繰り返した。松山ではもうこれ以上の吸収は望めないという文章は、思春期にありがちな一種の傲慢さで貫かれてはいるが、ひたすら向上を目指す真摯な姿勢が読む者に迫ってくるのも事実である。全身全霊をあげて当面の目的に向かう子規らしい、ひたと見すえて動かないまなざしを感じさせる。

上京は子規にとって悲願となっていた。それだけに加藤から上京をすすめる手紙が届いたときの喜びは大きく、明治十六年六月十日手紙を受け取って二日後に松山を発つのである。当時松山と本州とを結ぶものは船以外になく、人は三津浜を出て東京や大阪に渡り、

また三津浜に帰って来た。子規記念館には往時の三津浜の写真が拡大されて展示されているが、棧橋も何もなく、沖に停泊している蒸気船に乗るためには伝馬船を使わなくてはならない。瀬戸内海に面し、向かいに興居島が真近に見えて、外洋に漕ぎ出す悲壯感には遠かったかもしれないが、どこか心細い出港風景であった。その上、十五歳の一人旅である。六月十日に三津浜を出た船が神戸に着いたのが十一日夕刻。翌午後神戸を出て十四日横浜港着という船旅は、やはり心細く不安なものであったろう。「四時小舟其舟（筆者注・豊中丸）ノ中等室ニ投ス 送客皆船中ニ来リテ余ヲ送ラレタリ 別ニ臨ンデ各辞ヲ為ス 余ガ悲復發ス 狂詩アリ。少焉アツテ一声ノ汽笛ト共ニ纜ヲ解ク 余窓ヲ開テ望ム 三津港後ニ在リ興居島前ニ在リ 其快言フベカラズト雖其悲亦發セザルヲ得ズ 快也東都ニ赴テ宿志ヲ達セント欲スルニ因ル 悲ハ一人ノ我ニ伴フ者ナキニ因ルナリ」という文章には、勇躍東京に向かう喜びと、初めての孤独に悲哀を感じる様子とが素直に表現されている。

持ち前の性急さで故郷を出立した子規は、六月十四日午前新橋に到着した。故郷出立の友人たちと同様にまず旧藩主久松伯爵邸を訪れて友人の消息を得た子規は、しばらく柳原極堂の許に身を寄せ、幼友だちで親戚関係にもある三並良とも再会を果たす。叔父の加藤拓川に連れられて後に公私にわたって支えてもらうことになった陸羯南に会いに出かけたのも到着間もない頃であった。友人に励まされ、また同郷の先輩たちからも世話を受けた子規は、須田学舎から共立学校、そして明治十七年九月には大学予備門の試験に合格し、常盤会の給費生にもあげられるのである。こうした経過を見る限りでは、子規は順調に学問の道を進み、上京時の志に向かって着実に努力しているように見受けられる。が、実際は違っていた。はじめ

政治の道を志していた子規は、共立学校時代に『壮子』を学んだことから哲学に興味を持つようになった。また、大学予備門時代には新しい文学にも触れ、大いに啓発されている。青雲の志を抱いて上京した子規は、その目指す方向を次々に変え始めるのである。

「余が大學豫備門の試験を受けたのは明治十七年の九月であったと思ふ。此時余は共立學校（今の開成中學）の第二級でまだ受験の力は無い、殊に英語の力が足らないのであったが、場馴れのために試験を受けようぢやないかといふ同級性が澤山あったので固より落第の積りで戯れに受けて見た。用意などは露もしない。ところが科によると存外たやすいのがあったが一番困ったのは果して英語であった。活版摺の問題が配られたので恐る／＼それを取って一見すると五問程ある英文の中で自分に読めるのは殆どない。第一に知らない字が多いのだから考へやうもこじつけやうも無い。（略）或字が分からぬので困つて居ると隣の男はそれを『幫間』と教へてくれた、もつとも隣の男も英語不案内の方で二三人隣の方から順々に傳へて来たのだ、併しどう考へても幫間では其文の意味がさっぱり分からぬので此の譯は疑はしかつたけれど自分の知らぬ字だから別に仕方もないので幫間と譯して置いた。今になって考へて見るとそれは『法官』であつたのであらう、それを口傳へに『ホーカン』といふたのが『幫間』と間違ふたので、法官と幫間の誤などは非常の大滑稽であつた。（略）

とにかくに豫備門に入學が出来たのだから勉強してやらうといふので英語だけは少し勉強した。もつとも余の勉強といふのは月に一度徹夜して勉強するので毎日の下讀などは殆どして往かない。それで學校から歸つて毎日何をして居るかといふと友と雑談するか春水の人情本でも讀んで居た。それでも時々は良心に咎められて勉強

する、其法は英語を一語々々覚えるのが必要だといふので洋紙の小片に一つ宛英語を書いてそれを繰り返しく見ても暗記する迄やる。併し月に一度位の徹夜では迎も學校で毎日やるだけを追つ付いて行くわけには往かぬ。

ある時何かの試験の時に余の隣に居た人は答案を英文で書いて居たのを見た。勿論英語なんかで書かなくても善いのを其人は自分の勝手ですら／＼と書いて居るのだから余は驚いた。この様子では余の英語の力は他の同級生とどれだけ違ふか分からぬのでいよく心細くなった。此人は其後間もなく美妙齋として世に名のつて出た。

後年子規自身がそう述懐しているように、松山と東京とでは明らかに英語や数学の習熟度に差があった。法律を修める以前に、これらの学科が子規にとっては大きな壁となつたのである。

ここで子規は方向を転換する。自由民権運動に刺激され、熱に浮かされたようになったのは、もともと賊藩の出身である者が身を立得る絶好のものとしたからであった。子規には立身出世を望む傾向が強い。明治という時代の特徴でもあるが、無名で終わることを潔しとしない性癖が身についてしまつたのである。だから、いかに慣れ親しんでいても文学などは「人間一生の業」にはならないとして、ひたすらの政治に絞つてきたのである。しかし、東京での見聞はその考えを覆すに足るものであった。文学士坪内逍遙が『当世書生気質』や『小説神髓』を著わし、新しい文学を打ち出している。英語で答案を書いたことで子規を驚嘆させた山田美妙（齋）も小説家として華々しく登場した。文学でも出世や栄達がかなうと知つた子規は、政治や哲学を捨て、独自の新しい文学の想像を目指すに至るのである。

文学というものを考えた場合、子規の方向転換のしかたには疑問

が残る。このような入り方は邪道であると怒ることもできよう。が、時代の若さが生んだ考え方であり、誰もがパイオニアであつた当時には、子規のような選択も自然だつたのではないだろうか。「方向転換」と述べたが、それは誤りでむしろ「方法転換」と考えた方が良いのかもしれない。政治であれ文学であれ、子規は新しい時代に名を残す人間を目指していた。向上を目指す明治のエネルギーを、少しの疑いもなく自身の中に取りこんだ人間だつたのである。

III ま と め

以上、子規が明治という一大変革の時代の中でどのように考え、行動してきたかを特に明治十年代を中心に考察してきた。維新という未曾有の大事業の後、先駆者たちは新たな「国家」を築き上げるべく一心不乱に努力した。そしてその子弟たちは懸命に先駆者を追い、更には独自の道を拓こうとして思考錯誤を重ねたのである。頼るものは自身の決断以外にはない。次から次へと未知のものにぶつかると共に、彼らは考え、決断し、実行していった。明治とはそういった意味において、現代の我々が経験する以上に個人の決断が必要とされ、またその決断が結果となって表われる時代であつたと言えるのではないか。

大学在学中、子規は初めての咯血を見る。結核という、子規を悩ませた最大のものとの遭遇である。いくらかの紆余曲折があつたとはいへ、まずまず順調に歩んできた子規にとってこの結核は最大の障壁であつた。そして、この障壁を自身がしっかり見すえた上でそれを超えようとしたとき、初めて子規の文学は新しい光茫を放ち始めたのである。その障壁を見つめる視線の強さ、その後の確かな歩み――、それらもまた、明治を生きた者のしたたかな決断であつ

凝視と決断と—子規にみる明治—

たのかもしれない。

注及び参考文献

- ① この墓誌銘は河東銓にあてて書かれた、明治三十一年七月十三日付の手紙の中に登場している。引用は『子規全集』（講談社版昭和五十年）によった。
- ② 久保田正文著『正岡子規』（人物叢書一四四 吉川弘文館 昭和四八年）
- ③ 『墨汁一滴』明治三十四年三月九日付の中で子規は「雑誌日本人の説は西洋流に三四五の三箇月を春とせんとこの事なれども我邦には二千年来の習慣ありて其習慣上定まりたる四季の限界を今日に至り忽ち變更せられては氣候の感厚き詩人文人に取りて迷惑少なからず。」と陰暦を変更することの不都合を難じる一方、「東京の氣候を以ていはんには立春も立夏も立秋も立冬も十五日宛繰り上げて却て善きかと思はるゝなり。されば西洋の規定と實際は大差なき譯となる。」と述べ、陽暦の合理性も認めている。なお引用は前掲書①によった。
- ④ 『正岡子規』（新潮日本文学アルバム新潮社 一九八六年）参照
- ⑤ 『正岡子規』（新潮日本文学アルバム新潮社 一九八六年）参照
- ⑥ 『仰臥漫録二』中の記事。引用は『子規全集』によった。
- ⑦ 『伝記正岡子規』（松山市教育委員会編松山市立子規記念博物館友の会発行 一九九四年版）参照
- ⑧ 『日本の歴史4』（家永三郎編 ほるぷ出版 一九八七年）参照
- ⑨ 『漱石とその時代』（江藤淳 新潮社 昭和六二年）参照
- ⑩ 『正岡子規のリアリズム』と題して行なわれた徳島での講演の一部（一九九四年六月一日）。本文はその講演録を載せた『週刊朝日』（一九九六年一〇月四日号）から引用した。
- ⑪ 子規記念館所蔵品
- ⑫ 『佐幕派の子弟たち』（松山市立子規記念博物館友の会発行 平成八年）参照
- ⑬ 子規記念館所蔵品
- ⑭ 『正岡子規—五つの入口』（大岡信 岩波セミナーブックス5の 岩波書店 一九九五）
- ⑮ 前掲書⑨
- ⑯ 前掲書①参照
- ⑰ 前掲書⑫ 柳原極堂の文章参照
- ⑱ 子規記念館展示による
- ⑲ 子規記念館展示による
- ⑳ 前掲書②
- ㉑ 明治十六年二月十三日の加藤恒忠（拓川）あての手紙。引用は『子規全集』によった
- ㉒ 『東海紀行』（明治十六年七月）中の一節。引用は『子規全集』によった
- ㉓ 『墨汁一滴』（明治三十四年）六月十四日の項より。引用は『子規全集』によった